

令和3年11月4日

南の風 422

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

前号の、引用の続きになります。

この日本が取るべきスタイルと教育の不一致は、実はフットボールに限りません。守屋さんがこのことを嘆いたように、体格に劣る日本のバスケットボール指導者も脳内作業のスピードを上げることに力を注ごうとしています。これは、バスケットボール、ラグビーといったコンタクトプレーのある球技は皆、同じ傾向だと聞きます。

教育や人が育つ環境は、スポーツに大きく影響を与えるのです。

生き易いけれど、息苦しい日本

佐伯氏は、日本の子どもについて、禁止事項の多い中で「これとこれはいいですよ」と示されたものに従って生きている、と言います。

子どもたちが「外で遊びたい。サッカーボールを蹴りたい」と思っても、ボールを自由に蹴れる場所は極端に少ないし、この場所ならいい、この時間帯だったらと、細かく規制されているのです。

要するに全部黒の禁止エリアにしろのOK エリアがぽつぽつとある状態なのです。

続けて佐伯氏は、スペインでは路上駐車が非常に多いと言います。路駐禁止のエリアは極端に少なく、白と黒の割合が日本とは真逆だと言います。

また東京の街を歩いても、ゴミ箱が少ないのにゴミが落ちていません。海外の人たちから「奇跡だ」と言われると驚かれています、指摘します。日本は、共有されている公共の空間を自分がゴミを捨てて汚すことは許されない社会なのです。ゴミを捨てない風土があり、秩序が保たれています。

まわりの目が厳しいからです。

ところが、その厳しい目が、人の尊厳や人権について閉じられてしまっているとも言います。

ここから引用を続けます。

子どものこころを傷つける暴言や試合の出場機会に差をつける補欠問題など、大人の理解や意識でしか解決することのできないケースはなくなりません。学校や企業内でのパワーハラスメント、セクシャルハラスメントも同様です。

秩序は重んじられるのに、人権が軽く扱われていないのでしょうか。

かたやスペイン。道端にゴミが落ちているし、路駐も多いですが、ひとを蔑んだりリスペクトを欠く言動が許されない風土や空気があります。何よりも、人権・尊厳が優先されています。アスリート・ファーストという言葉も聞いたことがありません。当然の価値観なのでキャンペーンを張る必要がないからです。

両方の社会で育ってきた私の感覚でいうと、日本は「生き易いけれど、息苦しい国」ということになります。秩序ある風土を意地しつつ、人権や尊厳を重んじる社会を目指せば、さまざまなことが好転しそうに思います。